

学習障害が予測される児童に対する早期訓練とその意義(平成19年度心理科学研究科言語聴覚学専攻修士学位論文要旨)

著者名(日)	舘 幸枝
雑誌名	北海道医療大学心理学部研究紀要 : J Psychol Sci
巻	3
ページ	159
発行年	2007
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00006874/

学習障害が予測される児童に対する早期訓練とその意義

館 幸枝

〈目的〉

藤本耳鼻咽喉科クリニック（岡山市，以下Fクリニック）で，言語聴覚士が就学前言語訓練を実施し，9歳過ぎまで長期指導を行った症例を対象に，言語治療の立場から，就学時に学習障害を予測する指標を得るための研究を行う。

〈症例〉

1996年～2007年9月末までの11年間に，「ことばの遅れ」等を主訴に，Fクリニックで言語訓練を実施した18例。初診時平均年齢は4歳5ヵ月，2007年9月末時点での平均年齢は9歳2ヵ月，総訓練期間の平均は3年8ヵ月であった。

〈研究の方法〉

1) 18例に対し，著者が診療録から各症例の発達，知能，言語，読書力（以下，4つの言語・認知諸能力）を年齢別に抽出・整理した。4つの言語・認知諸能力「全てが問題あり」をA群（LDあり），「1つ以上で問題あり」をB群（LDの疑いあり），「全て問題なし」をC群（正常）と分類し，4～9歳代までの年齢別問題点を群別に検討した。さらに，LDの問題をより明確にするために18例から視覚優位型LD児1例，聴覚優位型LD児1例，問題なしの症例1例を抽出し，同様の方法で詳細に検討・分析した。3例の初診時平均年齢は3歳3ヵ月，2007年9月末時点での平均年齢は12歳3ヵ月，総訓練期間の平均は7年1ヵ月であった。

〈結果と考察〉

LD群では6歳代の4つの能力全てに問題が見られ，9歳代の知能検査の下位項目，読書力検査の下位項目でも問題があった。6歳代で問題が見られなかったB群では9歳代では問題があった。また，視覚優位型LD児では，5～6歳代では4つの能力の下位項目全てに問題があった。聴覚優位型LD児では，発達を除く他の検査で問題があ

った。5～6歳で見られた問題は9歳以降にも見られ，聴覚優位型LD児に比べ，視覚優位型LD児の遅滞が大きい結果となり，年齢の増加にともなって拡大した。

6歳を過ぎて訓練を開始したもの，6歳代の言語・認知諸検査の下位項目に問題があった場合には，LDとなる可能性が高く，6歳代の言語・認知諸検査の下位項目の成績差はLDを予測する指標となり得ることが示唆された。

脳の発達から考察すると，レネバーグは，正常児では6歳代に脳の90%が完成し，9歳では100%成熟する，脳の発達と同期して言語も9歳では成人レベルへ到達するとしている。レネバーグを参考にすると，6歳代で遅れがある場合には，その後も遅れをひきずる確率が高く，9歳でも問題は残存し続けると考えられる。また，思考と言語の発達から考察すると，森は6歳頃には日本語の音声言語能力（構音・言語性知能・語彙理解力）は完成し，就学とともに文字言語を媒介としたより複雑な学習が開始され，9歳頃には音声言語と文字言語を統合した言語体系が確立されるとしている。森を参考にすると6歳頃の日本語の音声言語能力に問題があった場合，その後のより複雑な言語学習が困難となる。6歳で問題があった視覚優位型LD児では，日本語の音声言語能力の発達に問題があり，9歳頃から開始されるより複雑な言語学習が困難で，その後の遅滞の拡大につながったと考えられる。LDが予測される児童に対する早期訓練の意義は，脳の成熟度と言語発達や言語と思考の関係に留意した就学前言語訓練を行うことで，6歳ころまでに音声言語能力を完成させ，9歳頃に顕在化するLDを予防することにあると考えられる。

〈主な文献〉

1) 森壽子：改訂版重度聴覚障害児の音声言語の獲得－9歳の壁打破 聴覚活用からの言語教育理論の提言－。にゅーろん社：2004。